

〈研究・調査報告〉

## 介護実習の最終実習段階までに必要な能力を 身に付けるためのルーブリックの妥当性の検証： 2018～2019年度の介護実習評価指標と介護実習評価の分析

林 和歌子

### 【要旨】

本稿は、本学介護福祉コースにおいて2018年度より導入を開始した「ルーブリックを用いた介護実習評価指標」の妥当性と改善点を検討したものである。介護福祉コースでは最終実習段階の目標を見通すことができ、かつ各実習段階共通で活用できる評価指標の開発を行ってきた。本研究では、2018年度及び2019年度の2年間のデータの蓄積を基に検証を行った。さらに、2018年度の導入時の検証で抽出された課題についても検討を行った。その結果、評価指標にある16の評価観点のうち、1観点を除き本評価指標が実習評価を測定できていることが明らかになった。

キーワード：介護実習、実習評価、ルーブリック

### 1. はじめに

介護福祉士は対象者の介護ニーズに個別に対応し、生活を支援する専門職である。そのため介護福祉士養成教育の中でも介護実習は、専門的知識や技術、倫理観を実践的に学ぶ機会として重要な意味をもっている。また、介護福祉士国家試験において実技試験が免除となっている養成校にとっては、実質的に実習学生の介護実践能力が国家資格として求められるレベルまで到達しているかどうかを測ることが求められている、ともいえる。

以上のことから、介護実習の評価には総括的評価と形成的評価の両方が求められ、この点について、柿本（2004）は、実習評価は総括的評価と形成的評価を組み合わせ、相互の確認と振り返りを繰り返し、学んだことと今後の課題を確認して進めていくことが必要であると指摘する。形成的評価で必要なことは、学習の目標や、求められる実践能力をどこまで修得しているのか、さらにどのような行動を改善しなければいけないかという具体的な評価の情報である。そこで本学介護福祉コースでは、これまでに行ってきた総括的評価としての「実習評価表」に加え、2015年度より全介護実習学生を対象に実習評価の一環としてルーブリックを用いた形成的評価の導入を検討してきた。

城西国際大学の介護福祉士養成は、2008年の創設以来、実習教育を1年間の学内の学びを総括して実践に取り組む機会として位置づけ、1年に1回、年度末の2月から3月にかけて行い、3年間で合計450時間の実習要件を修了するカリキュラムを組んできた。実習時期と期間は、1年次に施設実習90時間（2週間）、2年次に施設実習180時間（4週間）、3年次に施設実習180時間（4週間）及び在宅介護実習16時間（2日間）と設定している。実習施設は大学が介護実習契約を行った施設に限り、基本的に3段階とも異なる施設で実習をおこなうよう大学が配属を行っている。また介護実習は「介護実習Ⅰ」を前提科目にして「介護実習Ⅱ」を、そして「介護実習Ⅱ」を前提科目にして「介護実習Ⅲ」を履修する履修前提条件を課している。本学では特に施設実習についてはこの積み重ねの状況を踏まえ、「介護実習Ⅰ」を「実習段階Ⅰ」、「介護実習Ⅱ」を「実習段階Ⅱ」、「介護実習Ⅲ」を「実習段階Ⅲ」と位置付けている。本学の各介護実習の目的は（表1）に示すとおりである。

表1 城西国際大学の介護実習の目的

種類	実習時間	実習目的
介護実習Ⅰ	90時間	1 施設における利用者の生活を理解し、利用者との円滑な人間関係を構築する。
	12日間以上	2 利用者一人ひとりの心身の状況に応じた生活支援の在り方を考える。
介護実習Ⅱ	180時間	1 ICF（国際生活機能分類）の視点に基づき、利用者の生活全体を理解する。
	23日間以上	2 受け持ち利用者の介護過程の一部実践を通して、心身の状況に応じた介護を組み立てる能力を養う。
介護実習Ⅲ	180時間	1 介護過程の展開を通じて、利用者のニーズを理解し、適切な介護を専門的・計画的に提供できる能力を養う。
	23日間以上	2 介護福祉の本質と役割を理解し、介護実習の最終段階として、これまでの実習や関連科目で学習した知識や技術を統合して、人の生活を介護福祉の視点で捉えることができる。

城西国際大学福祉総合学科「2020年度介護実習の手引き」より筆者作成

実習評価は、2017年度までは介護実習評価表に基づいて6つの評価項目、16の評価観点に対し評価者がA～Dの4段階評価と自由記述のコメントで評価する方法を用いていた。しかし、その評価内容と根拠が学生に分かりづらいものであったため、2015年から介護実習最終段階を目指し適切な学修状況を示すとともに、個別の修得能力の状況が可視化できる評価指標の開発、作成に取り組んできた。そして2018年度より全介護実習学生を対象に実習評価の一環として「ルーブリックを用いた介護実習評価指標」を導入した。

## 2. 2018 年度介護実習で使用した評価指標の課題

2018 年度の介護実習で「ルーブリックを用いた介護実習評価指標」を導入後に、「介護実習評価指標 第 2 版」の妥当性と改善点の検証を行った。その結果、概ね本評価指標が実習評価を測定できていることが示されたものの、評価指標の一部に更なる検証が必要であることが明らかになった（林 2020）。指摘された課題は次の通りである。

- 1) 評価基準の説明内容が、生活支援技術などは具体的な技術の羅列であるのに対し、一般的なマナーなどについては段階的な表現とするなど、異なる説明方法が評価者の混乱を招いている可能性がある。評価基準の説明方法を統一することや、補足説明を加えるなど、混乱を少なくする方法の検証が必要。
- 2) 実習段階によって取り組まなかった内容が介護実習評価に影響することも明らかになった。そのため「該当せず」「実施せず」を明記できるような項目の追加や、「実施した場合のみ評価する」など提示する工夫が必要。
- 3) 印を記入しやすくするスペースが必要。

以上をふまえ、2019 年度は評価指標の一部修正をおこなった。

## 3. 「ルーブリックを用いた介護実習評価指標 第 2-1 版」の修正点

2019 年度に使用した「ルーブリックを用いた介護実習評価指標案 第 2-1 版」は、以下の修正をおこなった（表 2）。

- 1) 評価観点ごとに、どの実習を評価対象にするのか、また「実施した場合のみ評価」する観点にはその旨を記載した。
- 2) 字を拡大するために評価観点（1）～評価観点（7）を表面に、評価観点（8）～評価観点（16）を裏面に配置し、両面印刷とした。

なお「2. 1）」で指摘された評価基準の説明方法の統一や、補足説明の追加など、混乱を少なくする方法の検討については、調査対象のデータ数の少ないことが要因の一つとも考えられることを踏まえ、今回は、評価基準の内容については手を加えないこととした。

## 4. 研究の目的

本研究は導入から 2 年間のデータを用い「ルーブリックを用いた介護実習評価指標」の妥当性と改善点の検証を行うことを目的としている。

表2 介護実習評価表

介護実習評価表				
介護実習【《段階》】		城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科 介護福祉コース		
実習生	学籍番号		学生氏名	
	《学籍番号》		《学生氏名》	
実習先	施設名		施設長名	実習指導者名
	《施設》			
実習期間	自(始) 2019年 2月 12日 ~ 至(終) 2019年 月 日			
評価: 下記評価項目について、該当する評価A~Dをご記入ください。 【 A:優(80点以上) B:良(70点以上80点未満) C:可(60点以上70点未満) D:検討を要する 】				
	内容	評価	所見(必要な場合のみご記入ください)	備考
利用者の理解	(1)利用者との関係づくりができる			実習Iでは評価しない
	(2)個別のニーズの把握ができる			
介護技術	(1)利用者の個性及びその人の生活環境に対応した、日常生活に関する介護技術を習得している			
	(2)介護記録が書ける			
役割とチームケア	(1)介護職員の役割がわかる			
	(2)自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる			
	(3) ケースカンファレンス等、多職種協働の実践方法がわかる			
介護過程	(1)情報の解釈、統合化を行い、ニーズを明確にすることができる			
	(2)長期目標・短期目標を適切に設定し、介護計画が立てられる			
	(3)介護計画にそって実施し、評価ができる			
社会関係	(1)施設が地域に果たしている役割がわかる			
倫理・態度	(1)守秘義務を理解し、行動がとれる			
	(2)礼儀を理解し、マナーを守る			
	(3)積極性のある行動ができる			
	(4)協調性のある行動ができる			
	(5)責任感のある行動ができる			
実習指導者の総合評価(今回の実習で努力が見られた点、また今後の課題などについて、できるだけ具体的にご記入ください)				
上記の通り評価します。			平成 年 月 日	

表3 ループブリックを用いた介護実習評価指標 第2-1版 (表面)

実習施設:	学籍番号:	実習生氏名:	実習生の同意と当てはまる項目に○をふりかけください。(複数選択可) その後、本評価指標に基づき、別紙評価表にA～Dをご記入ください。 ◎評価項目に当てはまるものがない場合は、評価者の所見欄、または総合評価欄をご活用いただきご記入いただきますようお願いいたします。
評価基準 評価観点(目標)	評価観点(目標) (2)職能(主眼)	専門職に必要な基礎能力が身に付いている	専門職に必要な能力を十分に身に付けている
(1)利用者との関係作りができる	基礎的な能力のレベル まで達していない	①利用者・職員の名前を覚えることができる。 ②挨拶や自己紹介など、実習生自ら話しかけることができる	③不特定多数の人と関わるることができる。 ④利用者に合わせてコミュニケーションができる。
利用者の理解	基礎的な能力のレベル まで達していない	①高齢者・障害者の心身についての基礎知識があり、理解することができる。 ②ノロウイルス、インフルエンザなど感染症に関する知識があり、理解すること ができる。 ③利用者の心身の状態を知ることの必要性について理解することができる。 ④利用者のADLや活動の状況を知ることの必要性について理解することができる。	⑤主体的に情報収集ができる。 ⑥情報収集のもとに観察することができる。
(2)個別ニーズ把握ができる	基礎的な能力のレベル まで達していない	①介護技術の基礎知識があり、理解することができる。 ②利用者の個別性を理解するための病気や障害の知識があり、利用者の特性 を理解することができる。 ③介護前の声掛けをすることができる。 ④クライアントへの配慮をすることができる。 ⑤利用者の生活環境や生活習慣の理解ができる。 ⑥支援に必要なものがわかろうと、準備をすることができる。	⑦安全を確保し、危険を予測しながら介護を行うことができる。 ⑧利用者の心身の状態に合わせて介護を行うことができる。 ⑨利用者の人柄や希望を理解した介護を行うことができる。 ⑩利用者につながる方法で双方向の動作の説明ができ、同意を得ることができる。
(3)利用者の属性及びその人の生活環境に対応した、日常生活に関する介護技術を提供している	基礎的な能力のレベル まで達していない	①その場の興味関心に留まっていれば、目標のふりかえりについて述べるこ とができる。 ②内容は強いが、実習生の考えを述べることができる。 ③専門的でないような表現が多く、正確さに欠けるが、体験した事実や場面を 説明することができる。 ④使用した用具及び修正、個人情報の記述方法、指示された提出日時を守るこ とができる。 ⑤他者が読める字で、ロページの口/口以上は認識を書くことができる。	⑪非言語コミュニケーションを読み取ることができる。 ⑫利用者の特有の持っている力を出し、自立支援に向けた介護を行うことができ る。 ⑬介護内容の根拠を理解し、説明することができる。 ⑭ケアマネージャスを活用し、利用者、介護職員双方に負担の少ない介護を行 うことができる。 ⑮根拠に基づいた介護方法を提案することができる。
(4)介護記録が書ける	基礎的な能力のレベル まで達していない	①その場の興味関心に留まっていれば、目標のふりかえりについて述べるこ とができる。 ②内容は強いが、実習生の考えを述べることができる。 ③専門的でないような表現が多く、正確さに欠けるが、体験した事実や場面を 説明することができる。 ④使用した用具及び修正、個人情報の記述方法、指示された提出日時を守るこ とができる。 ⑤他者が読める字で、ロページの口/口以上は認識を書くことができる。	⑯目標と介護職員や施設、社会との関係など幅広い問題意識にもとづき、目標 について述べる。ことができる。 ⑰事前学習と関連付けて考えを述べる。ことができる。 ⑱体験した事実や場面を、わかりやすく、簡潔かつ論理的に記録することができ る。 ⑲字が丁寧で、誤字脱字がなく、役者も明確で読みやすい記録を書くことがで きる。 ⑳適切な文章量で簡潔に記録を書くことができる。
(5)介護職員の役割がわかる	基礎的な能力のレベル まで達していない	①助言があれば、利用者の心身の状態の変化を理解できる。 ②助言があれば、利用者の自立支援を理解して介助(支援)することができる。 ③助言があれば、施設内の福祉用具・機器を正しく使用することの大切さを理 解できる。 ④助言があれば、施設の環境整備をすることができる。	㉑利用者自身の状態の変化に合わせた対応ができる。 ㉒施設内の福祉用具・機器を正しく使用することができる。 ㉓施設内の環境整備を行い、リスクを予防した対応ができる。
役割とチームワーク	基礎的な能力のレベル まで達していない	①介護職員間で意見交換をすることの必要性を理解することができる。 ②他職種への話し合い・相談・協力をすることの必要性を理解できる。 ③他職種の役割や業務を理解することができる。	㉔自分役割を分担して、介護職員間で意見交換をすることができる。 ㉕他職種間の話し合い・相談・協力をすることができる。 ㉖他職種の役割を尊重したコミュニケーションをとることができる。
(7)カンファレンス等においてチームワークの実践ができる	II III の ふ	①提供しているサービスの内容と目的を理解できる。 ②カンファレンス等の開催目標を理解することができる。 ③利用者、家族の意向を中心に検討をすることができる。	㉗カンファレンス等で話し合い・意見を理解することができる。 ㉘カンファレンス等で介護目標としての意見を述べる。ことができる。 ㉙カンファレンス等の内容を適切に記録することができる。

表3 ループリッックを用いた介護実習評価指標 第2-1版 (裏面)

実習施設:		学籍番号:		実習生氏名:		⑨実習生の前置としてあてはまる項目に○をお付けください。(複数選択可)その後、本評価指標に基づき、別紙評価表にA～Dまで記入ください。 ⑩評価項目に当てはまるものがない場合は、評価者の所見欄、または総合評価欄をご活用いただきますようお願いいたします。	
介護実習	(8)情報の整理、統合化を行い、ニーズを明確にすることができ、	基礎的な能力のレベルまで進じていない	II、IIIのみ	①情報の内容、意味を理解することができ、 ②利用者に関する医療情報を収集することができ、	③情報と情報の関連性を整理し、情報と自らの持つ知識を統合化できる。 ④利用者から得た情報の状態の予推測ができる。 ⑤利用者の思いを把握することができる。	⑥利用者のニーズを明確にすることができ、	
	(9)長期目標、短期目標を適切に設定し、介護計画が立てられる。	基礎的な能力のレベルまで進じていない	II、IIIのみ	①計画が立てられ、ニーズが数回以上評価を繰り返す。長期目標が立てることができ、 ②計画が立てられ、長期目標、短期目標の関係を適切に設定できる。 ③計画が立てられ、段階的な期間設定をすることができ、	④計画が立てられ、計画に沿って実施することができる。 ⑤実践を各週別に記録することができる。	⑦介護計画(支援内容、方法)が5W1Hで具体的に立てることができ、 ⑧利用者及び家族やケアチーム間へ介護計画を適切に説明することができる。	
	(10)介護計画にそって実施し、評価ができる。	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①計画に沿って、適切な声かけや姿勢で実施できる。 ②実践を各週別に記録することができる。	③計画に沿って、適切な声かけや姿勢で実施できる。 ④実践を各週別に記録することができる。	⑥自らの進捗や介護職員の進捗記録などから、自身の達成度が判断できる。 ⑦今後の方針について検討することができる。	
社会実習	(11)施設が地域に果たしている役割がわかる。	基礎的な能力のレベルまで進じていない	II、IIIのみ	①施設が実習生を受け入れる意義を理解することができ、	②施設が行う地域に開かれた行事の意義を理解することができ、 ③施設がケアチームを受け入れる意義を理解することができ、	④利用者家族が施設に求める役割を理解することができ、	
	(12)守秘義務を理解し、行動がとられる。	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①正しい守秘義務の知識があり理解することができ、 ②複数回の具体的な指導によって、自ら個人情報保持の行動をとることができ、 ③複数回の具体的な指導によって、自らSNSの管理ができる。	④一部十分ではないが、守秘義務の知識が法に理解することができ、 ⑤一部具体的な指導によって、自ら個人情報保持の行動をとることができ、 ⑥一部具体的な指導によって、自らSNSの管理をすることができ、	⑦守秘義務の知識と理解が十分にでき、実習終了時まで自らの行動を徹底することができる。 ⑧守秘義務の知識に基づき、個人情報保持の行動をとることができ、 ⑨自らSNSの管理をすることができ、	
倫理	(13)礼儀を理解し、マナーを守ることができ、	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①介護職として礼儀やマナーの意味は理解しつつも個別の行動に伴わず、複数回指導によって守ることができ、 ②介護現場における清潔身だしなみと実習生の管理/丁寧な言葉遣い/笑顔/声かけ/感謝/目線を含むことができる。	②介護職として礼儀やマナーの理解はあるが、個別の行動によっては行動が伴わないこともあり、一部指導を行うことで自守守ることができ、 ③介護現場における清潔身だしなみと実習生の管理/丁寧な言葉遣い/笑顔/声かけ/感謝/目線を含むことができる。	⑤介護職として礼儀やマナーについてよく理解しており、自ら守ることができ、 ⑥介護現場における清潔身だしなみと実習生の管理/丁寧な言葉遣い/笑顔/声かけ/感謝/目線を含むことができる。	
	(14)積極性のある行動ができる	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①自分と向き考えるを持つ他者の意見を聞くことができ、 ②計画が立てられ、自ら考えることができる。 ③計画が立てられ、疑問点について質問をまとめることができ、	⑤自分と向き考える他者の意見を聞くことができ、 ⑥一定のルールを守ることができ、 ⑦他者の積極性や指導の一員としての行動が明確によりとることができ、 ⑧自分の行動を振り返ることができる。	⑧他者の異なる意見を聞くことができ、 ⑨他者の意見を聞きながら、自分の行動を振り返ることができる。 ⑩他者の積極性や指導の一員としての行動をとることができ、 ⑪自分の行動を振り返り、次に活かすことができる。	
	(15)感謝性のある行動ができる	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①自分と向き考えるを持つ他者の意見を聞くことができ、 ②計画が立てられ、自ら考えることができる。 ③計画が立てられ、疑問点について質問をまとめることができ、	⑤自分と向き考える他者の意見を聞くことができ、 ⑥一定のルールを守ることができ、 ⑦他者の積極性や指導の一員としての行動が明確によりとることができ、 ⑧自分の行動を振り返ることができる。	⑧他者の異なる意見を聞くことができ、 ⑨他者の意見を聞きながら、自分の行動を振り返ることができる。 ⑩他者の積極性や指導の一員としての行動をとることができ、 ⑪自分の行動を振り返り、次に活かすことができる。	
	(16)責任感のある行動ができる	基礎的な能力のレベルまで進じていない	IIIのみ	①自分と向き考えるを持つ他者の意見を聞くことができ、 ②計画が立てられ、自ら考えることができる。 ③計画が立てられ、疑問点について質問をまとめることができ、	⑤自分と向き考える他者の意見を聞くことができ、 ⑥一定のルールを守ることができ、 ⑦他者の積極性や指導の一員としての行動が明確によりとることができ、 ⑧自分の行動を振り返ることができる。	⑧他者の異なる意見を聞くことができ、 ⑨他者の意見を聞きながら、自分の行動を振り返ることができる。 ⑩他者の積極性や指導の一員としての行動をとることができ、 ⑪自分の行動を振り返り、次に活かすことができる。	

## 5. 研究の方法

### (1) 方法

介護実習I、II、IIIの評価者へ、実習評価を行う際に、予め「ルーブリックを用いた介護実習評価指標 第2-1版」に実習生の態度としてあてはまる項目に丸印を付けてもらい、その後、「介護実習評価表」(表3)のA～D評価を付けるよう依頼をした。すべて評価を終了した後に、実習評価表とともに丸印をつけた評価指標も大学へ返送をしてもらった。そして「ルーブリックを用いた介護実習評価指標案 第2-1版」に付けられた丸印の度数と、「介護実習評価表」(表2)に評価されたA～D評価の結果について、各16観点の評価基準ごとに相関分析を行った。

本研究では本評価指標の妥当性と改善点を明らかにするため、次の3つの方法で検討をおこなった。

- 1) 実習I、II、IIIのすべての実習を対象に分析する「全体分析」
- 2) 実習I、II、IIIごとに分析する「各実習分析」
- 3) 2018年度の各観点の課題との比較

### (2) 調査対象

2018年度及び2019年度に介護実習I、II、IIIを履修した実習生延べ67名である。各実習学生数は次の通りである(表4)。

表4 2018年度、2019年度の介護実習生数

	実習I	実習II	実習III	合計
2018年度	12	9	14	35
2019年度	12	9	7	28

### (3) 倫理的配慮

本研究は日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守するとともに、城西国際大学研究倫理委員会より承認を得て実施した。

## 6. 結果

16観点の評価について、それぞれの実習評価表の評価とルーブリック評価内容の記述に対する丸印の有無について度数を求め、実習段階ごとにクロス集計を行い、次の3つの方法で

検討をした。

(1) 実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲのすべての実習を対象に分析する「全体分析」

介護実習学生全体を対象とした「全体分析」では、16の全て評価観点において、概ねルーブリックの評価指標への丸印の付け方が実習評価に反映されていることが明らかになった。

(2) 実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲごとに分析する「各実習分析」

介護実習別に分析を行った結果、「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」は、評価基準の説明が「基礎」か「中程度」か「十分」の一文で説明されているため、各「レベル」のどれか1か所に丸印が付くことを予測していた。今回の分析の結果、実習ⅠでB評価よりC評価の方が、高いレベルに印が付く傾向があることが分かった。また、各レベルのどれかに1つの印を期待していたのだが、実習Ⅰ～Ⅲを通して、一部の実習学生に対し複数の丸印がつけられていることが明らかになった。さらに実習ⅡとⅢにおいては、C評価に一人ずつ、介護指標に印がつけられていない者がいることも明らかになった(表5)。

表5 (13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる

	評価基準		基礎的なレベル	中程度のレベル	十分なレベル
	実習評価	人数	①複数指導	②一部指導	③よく理解
全体	A	33	11 (33.3%)	10 (30.3%)	28 (84.8%)
	B	20	13 (65.0%)	13 (65.0%)	3 (15.0%)
	C	10	7 (70.0%)	5 (50.0%)	2 (20.0%)
	D	0	-	-	-
実習Ⅰ	A	12	4 (33.3%)	4 (33.3%)	10 (83.3%)
	B	7	3 (42.9%)	4 (57.1%)	0 (0.0%)
	C	5	4 (80.0%)	5 (100.0%)	2 (40.0%)
	D	0	-	-	-
実習Ⅱ	A	8	4 (50.0%)	3 (37.5%)	6 (75.0%)
	B	6	4 (66.7%)	4 (66.7%)	0 (0.0%)
	C	4	3 (75.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-
実習Ⅲ	A	13	3 (23.1%)	3 (23.1%)	12 (92.3%)
	B	7	6 (85.7%)	5 (71.4%)	3 (42.9%)
	C	1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-



### (3) 2018 年度の各観点の課題との比較

2018 年度介護実習についてルーブリック評価指標の丸印の付け方と実習評価の検証を行った際、詳細な検討が必要と指摘されていたのは、「(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる」、「(10) 介護計画に沿って実施し、評価ができる」、「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」である（林 2020）。そこで検討が必要である 3 つの評価観点について、今回の検証結果と比較し検討を行う。

#### 1) 「(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる」について

「(6) 自己の役割を自覚して、他の職種と協働できる」は評価基準の説明が他の評価観点と異なり、一つのパフォーマンスを“どの程度”できるのか表現している。（表 6）例えば「〇〇の必要性を理解できる」から「〇〇ができる」と、前のレベルを踏襲して次のレベルへと積み木を積み上げていくように評価基準を設定している。この積み木方式の基準設定では、実習生の該当する習得能力の「レベル」が上がるに従い、の多くの評価基準に丸印が付くことが予測される。しかし、この表現方法は他の評価観点では使用していないことから、2018 年度介護実習評価では、複数の評価観点で A 評価が B 評価、C 評価より低い割合となるなど、評価者の混乱を招いた事が要因ではないかと検討されていた。

今回の分析では、どのレベルにおいても、おおむね高い評価の方が評価指標に印の付く割合も多くなっており、「全体分析」、「各実習分析」共に、ルーブリックの評価指標への丸印の付け方が概ね実習評価に反映されていた。

表 6 (6) 自己の役割を理解して、他の職種と協働できる

	評価基準	実習評価 人数	基礎的なレベル			中程度のレベル			十分な能力のレベル		
			①介職間の意見	②他職種報連相	③他職種役割	④意見交換	⑤報連相	⑥連携必要性	⑦役割意見交換	⑧役割自覚報連相	⑨多職種尊重
全体	A	5	4 (80.0%)	4 (80.0%)	4 (80.0%)	4 (80.0%)	3 (60.0%)	5 (100.0%)	4 (80.0%)	3 (60.0%)	2 (40.0%)
	B	35	31 (88.6%)	29 (82.9%)	28 (80.0%)	17 (48.6%)	15 (42.9%)	27 (77.1%)	7 (20.0%)	9 (25.7%)	6 (17.1%)
	C	21	18 (85.7%)	15 (71.4%)	17 (81.0%)	4 (19.0%)	0 (0.0%)	5 (23.8%)	1 (4.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	2	1 (50.0%)	1 (50.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
実習Ⅰ	A	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	B	11	9 (81.8%)	8 (72.7%)	8 (72.7%)	4 (36.4%)	3 (27.3%)	7 (63.6%)	1 (9.1%)	4 (36.4%)	3 (27.3%)
	C	12	11 (91.7%)	7 (58.3%)	8 (66.7%)	3 (25.0%)	0 (0.0%)	4 (33.3%)	1 (8.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	1	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
実習Ⅱ	A	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	B	10	9 (90.0%)	8 (80.0%)	8 (80.0%)	5 (50.0%)	3 (30.0%)	8 (80.0%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)
	C	7	5 (71.4%)	6 (85.7%)	7 (100.0%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	1 (14.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	1	1 (100.0%)	1 (100.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
実習Ⅲ	A	5	4 (80.0%)	4 (80.0%)	4 (80.0%)	4 (80.0%)	3 (60.0%)	5 (100.0%)	4 (80.0%)	3 (60.0%)	2 (40.0%)
	B	14	13 (92.9%)	13 (92.9%)	12 (85.7%)	8 (57.1%)	9 (64.3%)	12 (85.7%)	4 (28.6%)	3 (21.4%)	1 (7.1%)
	C	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	2 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-	-	-	-	-	-	-

2) 「(10) 介護計画に沿って実施し、評価ができる」について

「(10) 介護計画に沿って実施し、評価ができる」は、評価対象は介護実習ⅡとⅢの実習学生としている（表 7）。介護実習Ⅱでは、時間の関係上、介護計画の作成で実習を終了する学生と、介護計画を実施する学生が混在している。2018 年度の実習評価については、介護実習Ⅱではほとんどの評価基準で A 評価より B 評価に丸印が付けられる割合が高くなる結果となっていた。この結果について分析では、評価者への評価依頼時に、介護計画の実施の有無によって評価をしなくてもよいという選択ができるように指示をしていなかった。そのため、一部の評価者は介護計画を実施していないにもかかわらず評価をした結果となっていたことについて、検討課題とした。

このことを踏まえ 2019 年度は「ループリックを用いた介護実習評価指標案 第 2-1 版」で、評価対象欄に「Ⅱは計画を実施した場合のみ」と但し書きを追記することにした。その結果、介護実習Ⅱの評価対象者数は、実習学生 9 名に対し 5 名と半数程度となった。今回の分析では、レベルが上がるに従って高い評価の割合が上昇していることから、ループリックの評価指標への丸印の付け方が概ね実習評価に反映されていると考えられる。「全体分析」、「各実習分析」共に同様の傾向がみられることから、ループリックの評価指標への丸印の付け方が概ね実習評価に影響していることが明らかになった。

表 7 (10) 介護計画に沿って実施し、評価ができる

	評価基準		基礎的なレベル		中程度のレベル			十分なレベル		
	実習評価	人数	①助言計画	②実践の記録	③実践	④自立、安全、尊厳	⑤客観的な記録	⑥目標達成度	⑦修正	⑧今後の方針
全体	A	10	8 (80.0%)	8 (80.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	6 (60.0%)	5 (50.0%)
	B	12	2 (100.0%)	11 (91.7%)	10 (83.3%)	8 (66.7%)	7 (58.3%)	2 (16.7%)	3 (25.0%)	4 (33.3%)
	C	13	10 (76.9%)	10 (76.9%)	4 (30.8%)	2 (15.4%)	3 (23.1%)	1 (7.7%)	1 (7.7%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-	-	-	-	-	-
実習Ⅰ	A	0	-	-	-	-	-	-	-	-
	B	0	-	-	-	-	-	-	-	-
	C	0	-	-	-	-	-	-	-	-
	D	0	-	-	-	-	-	-	-	-
実習Ⅱ	A	0	-	-	-	-	-	-	-	-
	B	3	3 (100.0%)	2 (66.7%)	2 (66.7%)	2 (66.7%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	C	11	8 (72.7%)	8 (72.7%)	3 (27.3%)	2 (18.2%)	3 (27.3%)	1 (9.1%)	1 (9.1%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-	-	-	-	-	-
実習Ⅲ	A	10	8 (80.0%)	8 (80.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	7 (70.0%)	6 (60.0%)	5 (50.0%)
	B	9	9 (100.0%)	9 (100.0%)	8 (88.9%)	6 (66.7%)	5 (55.6%)	2 (22.2%)	3 (33.3%)	4 (44.4%)
	C	2	2 (100.0%)	2 (100.0%)	1 (50.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	D	0	-	-	-	-	-	-	-	-

### 3) 「(13) 「礼儀を理解し、マナーを守ることができる」について

「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」は、各レベルに一つの基準としている。さらに、その内容を礼儀やマナーの例として「時と場面に合わせた挨拶」「清潔な身だしなみと実習着の管理」「丁寧な言葉遣い」「笑顔」「お礼・感謝」「目線を合わせる」等を挙げ、「複数回の指導」、「一部指導」、「自ら」といった、指導の回数などで評価基準を説明している。但し、どの礼儀やマナーに指導を要したのかについては、評価指標ではわからない表記となっている。2018年度の分析では、評価によらず、すべてのレベルに印の付く傾向があり、この点について課題を指摘した。

今回の分析では、先に「(2) 実習I、II、IIIごとに分析する各実習分析」で指摘したとおり、実習IではB評価とC評価で、印の多く付くレベルに逆転傾向がみられることと、2018年度と同様各レベル1か所に印が付くことを想定していたが、複数つくことがあり、評価指標に付く丸印と実習評価の間に関係性は明らかにならなかった。

## 7. 考 察

本研究では、「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」を除いた15評価観点で実習段階に関わらずルーブリックの評価が実習評価に反映されていた。(13)については、評価基準の説明が曖昧かつ、多くの要素を含んでいることから、矛盾した評価が行われることになっていた。前回、提案された実習評価の「所見欄」の活用についても、あまり使用されておらず、実習学生にとって具体的に何が問題だったのか、何の行動や態度を直せばよいのかが分かりにくくなってしまっていることが明らかになった。(13)の評価観点については、評価基準の説明内容に、例に挙げている内容を組み込む等の修正を行い、学生に評価の内容をわかりやすくする必要があると考える。

## 8. 結 論

2018年度の導入から2年間のデータを対象に介護福祉コースで開発をした評価指標の検証を行ってきた。その結果2018年度及び2019年度に行った介護実習I、II、IIIでは、「介護実習評価指標 第2-1版」による評価と「実習評価表」との間に、「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」以外の全ての評価観点で相関関係が認められることが明らかになった。以上のことから、一つの評価観点を除き本評価指標が実習評価を測定できていることが証明されたといえる。

今後の課題として、「(13) 礼儀を理解し、マナーを守ることができる」の評価観点の見直しを行うとともに、継続して検証を行い、介護福祉士に求められる総合的な能力を実習生が認識するための評価指標として完成させたい。さらに今後の展開として本評価指標を活用し、

各実習後の学生の自己評価、フィードバック、次の実習の課題と目標設定などを実施し、形成的評価に取り組みたい。

### 【参考文献】

林和歌子，大内善広（2017）「ルーブリックを用いた介護実習評価法の開発」城西国際大学紀要，第 26 巻第 3 号，福祉総合学部 p37-50.

林和歌子（2020）「介護実習における最終段階までに必要な能力評価に対するルーブリック評価の導入と妥当性の検証：介護実習評価指標と介護実習評価の関係」城西国際大学紀要，第 28 巻第 3 号，福祉総合学部 p71-94.

柿本誠（2004）「社会福祉援助技術現場実習評価の実態と課題—形成的評価の必要性」日本福祉大学社会福祉論集（111） p53-72.

公益社団法人日本介護福祉士会（2019）「平成 30 年度 生活困窮者就労準備支援事業費等補助金 社会福祉推進事業介護福祉士の養成カリキュラム改正を見据えた介護実習科目の実習指導体制のあり方に関する調査研究事業 介護実習指導のためのガイドライン」日本介護福祉士会.

城西国際大学福祉総合学部福祉総合学科介護福祉コース（2020）「2020 年度介護実習の手引き」城西国際大学.

# Implementation and Validity Examination of a Rubric for Evaluating Student Skills Necessary for Completion of Care Work Practice Education 2:

An Analysis of the Care-work Practicum Evaluation and the Rubric Evaluation for the 2018 and 2019 Academic Years

Wakako Hayashi

## Abstract

This research analysis was done to evaluate the validity and improvements made to "the rubric for the care-work practicum" that was incorporated into the care-work course at our university in 2018. We have been developing the rubrics that can be used to foresee the end goals of the final training stage and that can also be used in each stage of the training course. This paper reports on the verification study that we conducted based on the care-work practicum evaluation and the rubric evaluation for 2018 and 2019. Moreover, the problems identified in the 2018 rubric were also examined. The results of our analysis revealed that this rubric can measure the skills needed to complete the care-work practicum. However, the rubric was unable to effectively measure one of the 16 evaluation perspectives in the evaluation.

Key words: care-work practicum, performance evaluation, rubric